

ケアセンターけやき(通所リハビリテーション)

症 例 概 要 利用者：80歳代 男性 要介護2

利用期間 ：R6.10～

主病名 ：橋下部被蓋左側梗塞

既往歴 ：高血圧、脂質異常症、2型糖尿病、排尿障害、前立腺肥大症疑い、
急性気管支肺炎、腸閉塞、尿路感染症、COVID19感染症

経 過 ：

病後、抑うつ状態。見当識や意欲の低下が著明で、リハビリや生活など身の回りのことに対して常に受け身の状況だった。

その人らしさを取り戻すことを目標に、生活歴のエピソードに沿ったレクやリハビリを提供。次第に笑顔が増え、他者交流に繋がり、リハビリにも意欲的に取り組まれるようになり、今では通所リハビリを心待ちにして、楽しくご利用されている事例。

内 容

ご利用開始当初は活気が乏しく、「リハビリは言われたらやるもの」と常に受け身な姿勢が見られた。送迎時にも「今日がその日だったっけ?」と話されるなど見当識の低下もあり、通所への意欲は低かった。

そこで私たちは、身体機能だけでなく、その人らしさや笑顔を取り戻すことを目標に支援を開始した。

まず、ご本人の生活歴や興味のあるものを聴取し、元料理人であったことや、人と接することがお好きであることがわかった。地域ボランティアによるハンドケアへお誘いしたところ、「女性に手を握られたのは、亡くなった妻以来だよ」と照れながら笑顔を見せ、奥さんとの思い出を語ってくださった。その表情は今までにないほど穏やかで、私たちは「人とのつながり」がこの方の力になると感じた。

さらに外出リハビリとして地域のカフェにご協力いただき、料理体験を実施した。昔、中華料理人として働いていた経験を思い出され、手際の良さに周囲から「さすがですね」「上手ですね」と声が掛かると、自然と笑顔があふれ、「料理自体久しぶりだし、こんなに楽しいのは初めてだよ」と話しながら自信に満ちた表情へと変わっていった。

その後はリハビリにも前向きに取り組まれるようになり、送迎時には「今日は通所の日だろ?」と来所を楽しみに待たれる様子が見られるようになった。笑顔や会話も増え、地域の方々との交流を通じて、ご本

人らしい役割や生きがいを再び感じられるようになった。

この事例を通して、私たちは「できないこと」に目を向けるのではなく、ご利用者の人生や経験、地域とのつながりを活かした支援が、笑顔や意欲を引き出す大きな力になることを改めて実感した。これからも、その人らしく輝ける支援を大切にしていきたい。

【OUR TEAM】

- ケアマネジャー（CM）：本人の課題や意欲向上の為の支援計画の立案、多職種連携の推進
- 介護職員：安心できる活動環境の提供・日常の声かけ、見守り
- セラピスト（PT）：週2回・1回20分間の個別運動プログラム実施・活動意欲の引き出し
- 通りハ職員全体：交流の場の提供・楽しく過ごしてもらうためのレクやリハの提供